アーキテクチュラル・アソシエーション創設時における 建築教育の理念と内容

1847年から1859年を中心に

IDEAS AND PROGRAMMES OF ARCHITECTURAL EDUCATION IN ESTABLISHING THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION

From 1847 to 1859

渡 邊 研 司*

Kenji WATANABE

The aim of this paper is to demonstrate ideas and programmes of the Architectural Association which was established in 1847 by British young architectural draftsmen, Robert Kerr and Charles Gray by historical investigation through the writings and discourses on their concerns in the 19th century Britain. The ideas and programmes of the AA are as follows:

1. The background of establishing the AA was reflected upon the appearance of the notion of architectural profession in which the system of pupilage did not succeed very much, while there were many associations organized in order to promote and educate own members to become as gentlemen.
2. The ideas and programmes of the AA were to supply the room and chance for architectural education to capture the knowledge and philosophy through the scheduled discussions and lectures, as well as exhibition.
3. The AA as preparatory school for becoming architect was developing as modern architectural school after introducing the examination for accreditation of diploma.

Keywords : *Architectural Association, Architectural Education, Robert Kerr, Charles Gray, Association of Architectural Draughtmen, Royal Institute of British Architects*

アーキテクチュラル・アソシエーション, 建築教育, ロバート・カー, チャールズ・グレイ, 建築製図工連盟, 王立英国建築家協会

1. はじめに

本論文は、1847年ロンドンに創設されたアーキテクチュラル・アソシエーション(The Architectural Association 建築協会 以下AA)に着目し、創設時における理念がどのような社会的背景の中で誕生し、誰によって、どのような内容をもって、学校としての建築教育に結びついたのかを明らかにすることを目的とする^{注1)}。

一般に、AAの存在はAAスクール(The Architectural Association School of Architecture 建築協会附属建築学校 以下AAスクール)という名称で認知されているが、正確にはAAという会員制の組織があり、その附属学校という形がとられている^{注2)}。つまり、創設時からスクール(学校)という名称は使われていたものの、学校としての制度が確立して建築教育が行われたのではない。AAが学校からはじまったのではなく、会員制の組織であるとはいえ、創設から160年以上が経った現在において、建築学校としての存在と建築教育への影響が国際的であることは、AAスクール出身の建築家の活躍や関連する出版物を見れば首肯できる^{注3)}。

しかしながら、そのような建築教育に対する貢献があるにもかかわらず、それを検証する学術的研究は、イギリスにおけるものを除

き、ほとんど行われていない。日本においては、瀬口哲夫によるイギリス建築職能史および筆者によるモダニズム教育研究があるにすぎない¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。イギリスにおける研究も、その焦点は筆者と同様に、1930年代から40年代にかけてのモダニズム教育に関わるものにあり、AA創設時に着目したものは、概説的な研究を除いて十分なものではない⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。

一方、AAスクール自体においては、2007年からAAに関わる史料の整理が始まり、2011年からはAAスクールがあるベッドフォード・スクエアの建物の一部がAAアーカイヴズとしてオープンしたことから、ようやく最近になってAAに関する歴史的研究を行う上での基盤が整ってきたといえる^{注4)}。

本研究の意義は、建築家という職能が誕生した19世紀イギリスにおける建築製図工の徒弟制度と建築家の存在、建築教育への必要性和その内容、アソシエーションという18世紀半ばから始まった都市文化と人間関係の構築という大きく三つの側面を考察することで、近代における建築教育ならびに建築家の職能に関する本質的問題の一端を明らかにすることにある。さらに、国と時代は異なるとはいえ、現代日本における建築教育の諸問題、特に大学院での一級建築

* 東海大学工学部建築学科 教授・博士(工学) AA Graduate Diploma

Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, Faculty of Engineering, Tokai University, Dr. Eng. AA Graduate Diploma

士実務認定に対する議論の参考になることが期待できる。

上記に触れた先行研究と史料の内容について確認しておきたい。イギリスにおける建築教育の歴史に関しては、著作という形で、以下の三つが代表的な存在として知られている。

邦訳がなされているものとして、イギリスの建築史家であるフランク・ジェンキンスによる『建築家とパトロン 16 世紀から現代までの建築家の職能と実務の史的研究』（原著 1961 年邦訳 1977 年）があり、その中の第 8 章「十九世紀の建築家の養成」において、ジェンキンスは、フランスとイギリス事例を比較しながら、建築教育の始まりとその問題点を考察している¹²⁾。

同様に邦訳がなされている、アメリカの建築史家スピロ・コストフが編集した『建築家-職能の歴史』（原著 1977 年邦訳 1981 年）の中で、イギリスの建築史家であるジョン・ウィルトン＝エリーによる第 7 章「英国における職業建築家の形成」では、先のジェンキンスによる論考と重なるものの、職能の始まりを 16 世紀から捉えることによって、他の職能であるサーヴェイヤーなどとの比較が考察されている¹³⁾。

邦訳がなされていないのは、マーク・クリンソンとジュルズ・ルボックによる“ARCHITECTURE art or profession?” (1994)で、第 2 章の The design of professionalism and its resistance 1834-1938 では、RIBA (Royal Institute of British Architects 王立英国建築家協会 以下 RIBA) の設立、AA の創設を徒弟制度という時代背景、建築家試験の設立などとともに考察されており、本研究を進めるにあたって指針となっている。しかしながら、AA に焦点を絞ったものではなく、またタイトルからわかるようにあくまで概説的な研究となっている¹⁴⁾。

一次史料としては、以下のものが挙げられる。一つは、AA 創設メンバーの一人、ロバート・カー (Robert Kerr 1823-1904) による 発言をまとめた “The Newleafe Discourses on the Fine Art Architecture” (1846) である¹⁵⁾。二つはユニバーシティ・カレッジ (University College 以下 UC) の教授であり、RIBA 設立と建築教育に関わった T.L. ドナルドソン (T.L. Donaldson 1795-1885) による建築理論と建築家教育の提言 “Architectural Maxims and Theorems in Elucidation of Design and Construction and Lecture on the Education and Character of the Architect” (1847) がある¹⁶⁾。さらに AA の創設 100 年の際に出版され、建築史家であり本人も AA スクール出身であるジョン・サマーソン (John Summerson 1904-92) による “The Architectural Association 1847-1947” (1947) がある。これは厳密にいうならば創設当時のものではないため、二次史料的な存在ではあるが、創設の経緯などが詳細に述べられているという意味においては一次史料として捉えられる¹⁷⁾。

2. AA 設立の背景

2-1 徒弟制度とその問題点

サマーソンによる AA100 年史は、イギリスの国民的作家チャールズ・ディケンズによる小説、『マーティン・チャズルウィット』に出てくる建築家ベックスニフが、徒弟制によって暴利を得ている描写から始まる^{注 5)}。当時 18 世紀後半から 19 世紀にかけて、イギリスにおいて建築家になるには、建築家の事務所に入って 5 年間の修業をすることが主なる道であった。しかしながら、実際修業の対象とな

図 1 ディケンズ マーティン・チャズルウィット

った建築家は、仕事がない場合、徒弟制に対する入金によって、生計を立てていたと言われている。その人間模様が社会風刺となってディケンズによって表現された。つまり、建築家を目指して事務所に修業に行っても仕事がないため、建築を学ぶことができない場合が多々あったことがディケンズの小説によって理解される^{注 6)}。

本来、建築事務所での徒弟制においては、建築製図を始め、積算、モデル作成など、

実務一般を修得し、夕方から、建築の知識を得るため、建築学校に通うというスタイルがとられていた。しかしながら、実際存在した建築学校は、1768 年に設立された王立アカデミー (Royal Academy) と 1837 年に設立された官立のデザイン学校 (Government School of Design) が在るのみであった^{注 7)}。18 世紀末にフランスに設立されたエコール・ポリテクニークや 19 世紀初めに設立されたエコール・デ・ボザールと比較すると、イギリスにおいては建築家の徒弟が、建築を体系的に学べる機会は、急揃えでつくられた美術学校で、画家や彫刻家と一緒に学ぶか、あるいは、彼らの一部有産階級出身者が、前述した王立アカデミーの講義を聞いたり外遊したりするほかないのが当時の状況であった^{注 8)}。

一方、イギリスにおける大学としての建築教育は、1840 年にロンドンのキングス・カレッジで、ロイヤル・アカデミーに属する建築家であったウィリアム・ホスキング (William Hosking 1800-1861) による、「土木および建築の構造術」の教室が開かれたことに始まる。また、1841 年には、前述したようにドナルドソンが UC の教授として任命され講義を行った。両校ともこれらの課程は夜間開かれる定時制であった。ジェンキンスによれば、ドナルドソンは、学校教育が事務所での教育にとってかわることはないと考えていたが、定時制の授業が、師匠の仕事の中で得た実務的な経験を完全なものに仕上げるという点で有意義だとの見解を持っていた^{注 9)}。

このように、イギリスにおける建築および建築家の教育は、フランスにおけるそれらの中央集権化とは異なり、私設の民間団体あるいは個々の大学の自主性に委ねられるということになった。

2-2 建築教育の場

1840 年代に、建築家のヘンリー・モウレイ (Henry Mawley) の事務所 で修業し、前述した官立のデザイン学校に通っていた建築製図工であった、チャールズ・グレイ (Charles Gray 1828c.-1882c.) は、デザイン学校の内容が体系的でないこと、オーダーのコピーに従事するばかりで、講師による教授の内容がいい加減であることなどを、学校に訴えていた^{注 10)}。しかしながら、それが改善される見込みがないとして、1846 年に学生たちが自らの学校を創ることを、1842 年に創刊された『ビルダー』 (The Builder 以下ビルダー誌) の 3 代目の編集長であり建築家であった、ジョージ・ゴドウィン (George Godwin 1815-1888) 宛にその内容を綴った手紙を送った。このグレイによる手紙は、1846 年 9 月 26 日号のビルダー誌に、「一人の建築学生」と題した論稿として発表された^{注 11)}。

一方、ニューヨークでの修業を終えてロンドンに戻って来たロバート・カーは、自らの建築に関する理念とそれには何を学ぶことが

図2 ロバート・カー

その時代の建築に対する批判は、グレイのものと同様、ビルダー誌に連載された^{注13)}。

このように、ビルダー誌の編集者ゴドウィンを通して知り合ったグレイとカーは、二人が建築教育に対して相互教育の場の必要性という考え方を共有することを知り、建築家を目指す建築製図工のための教育の場をつくることで意気投合したと考えられる。

また、1842年には、前述したような建築製図工に対する問題を改善しようとして、その相互の技倆向上と図面の蒐集、それらの無料貸出し、雇用契約の継続などを目的とした組織である建築製図工連盟 (Association of Architectural Draughtsmen 以下 AAD) が、建築家シドニー・スマーク (Sydney Smirke 1798-1877) のチーフ製図工であったジェームズ・ウィルソン (James Wylson 1811-1870) によって設立された^{注14)}。カーとグレイもメンバーとなっており、ウィル

ソンのリーダーシップの下、活動は続けられたが、ウィルソンが 1843 年に、スコットランドにおける住宅モデルの設計競技で当選すると、グラスゴーに移ったため、活動が衰退化していた。カーにとって、AAD はメンバーの世代が 30 歳を超えたものが多くおり、若い世代が活動の中心となるべきだと感じていた^{注15)}。

図3 ジェームズ・ウィルソン

カーは 1847 年 2 月 3 日、AAD に「建築教育」を主題とした会合の講師として招かれ、“*The Newleafe Discourses*” の内容に基づきながら、建築学校の必要性和一刻も早い設立を主張した。カーによる講演の後、建築デザイン学校が AAD と提携して設立される旨の記事が、ビルダー誌に掲載された。3 月 3 日には、AA 設立準備会議が開催され、AAD の既存のメンバーと若い新しいメンバーとが実務レベルで話し合いを行った^{注16)}。

1847 年、5 月ビルダー誌にはじめて “ARCHITECTURAL ASSOCIATION” というタイトルのレポートが掲載された。それは、建築家 J. K. コーリング (J. K. Colling 1816-1905) によるもので、建築思想を重視するカーによる考え方とは異なって、実務とのつながりを主張するものだった。それを受けて、7 月に、カーによる応答が「建築スタイル」と題して掲載された^{注17)}。このビルダー誌上での二人による討論が、最終的には 10 月 8 日、ロンドンのストランドにあるライアンズ・イン・ホール (Lyon's Inn Hall 1863 年解体) で開催され、これが AA 創立集会を兼ねた第 1 回討論会 (Conversazione) となった^{注18)}。

ライアンズ・イン・ホールは、AA が 2 週間ごとの金曜日に借りることになり、1859 年 4 月にコンジット・ストリート (Conduit

Street) にある建物に移るまで、ここが AA の本拠地として使用された^{注19)}。

2-3 アソシエーション文化

ところで、18 世紀半ばから 19 世紀にかけて、イギリス、特に大都市であったロンドンを中心に、人々の集まりである、クラブ、ソサエティ、リーグ、ブラザフッドという名のもと、自発的に、外部から強制を受けることなく設立、加入し、自力で維持・運営するヴォランティア・アソシエーションといわれる組織が生まれた。コーヒー・クラブや紳士クラブ、あるいは教育を受けてこなかった労働者階級のための啓発的勉強会などが盛んに組織され、都市という環境に適合する新しい共同性を提供し、人々のあいだに結びつきと独特の都市文化をつくりだす役割を果たしていたことが知られる^{注20)}。

これらアソシエーションの最大の特徴は、公的機関からは独立したセルフ・メイドの民間団体であることである。また、明確な目的を掲げて、明文化された規約にもとづいて運営されており、一般に開かれているのではなく、規約に定められた手続きを経て、メンバー資格を得た者だけの場であることにもその特徴がある。

まさに AA の創設は、このようなアソシエーション文化の背景の最中で誕生しており、AA はその名前のように、また社会的には弱い立場であるが、建築家を目指す若い建築製図工が、前述したようなフランスにおける中央権力主導のものとは異なって、AAD という既存のアソシエーションを発展させることで、自らによって相互に教育し合う場所と機会をロンドンという都市の中でつくったと考えられる^{注21)}。

さらに、19 世紀イギリスにおけるアソシエーションの成立過程を研究する小関隆によれば、アソシエーションの一つとして設立され、中心的な存在であった労働者クラブ・インスティテュート同盟 (Working Men's Club and Institute Union) では、教育的効果を高めるために、クラスと呼ばれる講演、討論と呼ばれるディスカッション、さらにクラブ内において張り合いと切磋琢磨が生まれるよう、コンペティション (試験) が行われた。このことは、下記で考察するように、AA での教育内容のあり方と深く関わっていると考えられる^{注22)}。

3. 設計のための教育

3-1 討論会の重要性

前述したように、AA の創設は、第 1 回の討論会という形がとられた。これは AA における建築教育を象徴するできごとであった。なぜならば、160 年以上が経った現在においても、AA では外部から著名な建築家や評論家、歴史研究者を招き、毎週イブニング・レクチャーと称される講演会が継続されており、学生および会員への教育に対して重要な役割を果たしていることから伺えるからである^{注23)}。

図4 ライアンズ・イン・ホール

ライアンズ・イン・ホールで開かれた第 1 回討論会では、初代会長になったカーによる基調講演が行われ、100 人を超える聴衆が集まった。さらに、ゲストとして UC の教授であったドナルドソンが招かれた^{注24)}。ドナルドソンは、RIBA の前身である英国建築家協会

(Institute of British Architects)が1834年に設立された際に、建築家職能団体の必要性を訴え、その設立に大きく寄与し、初代事務局長として組織づくりにあたっていた。また、1847年に、建築理論と建築家教育の提言を出版していた^{注25)}。

カーは、基調講演で、AAの目的は「建築を学ぶための仕組みを向上させることと、それに対して学生自身が相互努力することにある」と述べた^{注26)}。創立から160年以上経ってもこの自主性を重んじることが、歴史上、何度もロンドン大学などの他の組織との合併問題が出たにも関わらず、インディペンデント(独立組織)・スクールとしての立場をとっていることから、AAでの教育の核となっていることを示している^{注27)}。

また、ゲストのドナルドソンは、カーに引き続き、問題提起という形で、「大きな問題は、我々は、我々の時代の建築、紛れもなく個性的で明瞭な19世紀の様式を持つべきか否か、である」という発言を行った^{注28)}。おそらく、グレイとカーには学術的背景が薄いことから、彼らの建築家になるための自己教育の場の提案に対して、建築教育に対する理論的支柱となる存在として、また、RIBAさらにユニバーシティ・カレッジ教授という立場として、ドナルドソンが招かれたと考えられる^{注29)}。

図5 討論会ポスター

このような会合(Meetings)は、規模の違いによって Conversazione や Lecture(講演者によるスピーチが中心で、そのあとにディスカッションを行う)という形で、創設から12年間、年間行事として2週間ごと金曜日に開かれることになった。

グレイとカーによるAA創設には、徒弟制によって修業していた建築事務所や夜間の学校では、設計に対する知識や理論が得られないことへの不満が、その強い動機となっている。

それゆえ、このような会合は、AAにおける建築教育、特に設計のための問題提起の場として見なされた。討論会での議論を継起に、空いている日の夕方にAAに集まり、会員同士が自らのスケッチや図面を持ちよって他人の図面を検討し、批判しながら互いに学びあった。これが、設計のための教育としてAAで始められた方法である^{注30)}。

今日においてもAAスクールには、日本の大学の建築学科にあるような製図板がある教室は存在しない。設計の授業は、そこで製図やエスキースをすることではなく、教師と学生が議論することが授業であり、そのことは、議論の場と人材を提供することがアソシエーションの役目であるという創設時の考え方が受け継がれていることの証左である^{注31)}。

AAの会員は、創設から若手の建築製図工を中心にその数が増加し、1849年には140人、1851年には166人になった。当時若手の建築製図工であり、後に名をなす建築家である、ウィリアム・エデン・ネスフィールド(William Eden Nesfield 1835-1888)が1851年に、彼の友人であったリチャード・ノーマン・ショウ(Richard Norman Shaw 1831-1912)とフィリップ・ウェッブ(Philip Webb 1831-1915)が1853年にAAのメンバーとなった^{注32)}。

ところで、当時AAのメンバーになるには、資格が必要であったわ

けではない。前述したアソシエーションの特徴である、同じ目的すなわち建築家になることを希望し、それに向けて学習する意欲のある建築製図工ということのみが条件であった^{注33)}。

3-2 建築展覧会と記録の出版

前述したようにAAは、創設の際、AADをその母体としたために、その活動内容を受け継いでいる。特にAADにおいて製図工の教育の一環としての図面の蒐集があり、それらの図面を無料で貸出したり、展示会などを行っていた。この活動はAAにも引き継がれ、討論会を継起に会員同士持ち寄った図面などを、より相乗効果を高める教育の場としての意味合いを持たせるように、討論会場において展示を行なった^{注34)}。この展示会も、形と内容を変えながらも、現在のAAスクールに引き継がれており、一ヶ月間くらいを目処に、テーマに基づいた展覧会が、ギャラリーやバー、メンバーズルームで行われている^{注35)}。

1849年までは、この展示会は、AAの年間行事として、AADの時に蒐集していた図面を基に、多作で知られる建築家サー・ジョージ・ギルバート・スコット(Sir George Gilbert Scott 1811-78)によるものや、『装飾の文法』の著者として有名な建築家オーエン・ジョーンズ(Owen Jones 1809-74)によるもの、前述したドナルドソンによる図面の展示会として開催された^{注36)}。しかしながら、1850年に、建築展覧会自体がAAから離れ、独立した組織となった。その一つの理由としては、AA運営に対する財政上の問題が挙げられ、蒐集や展示準備において支障をきたしたとされる^{注37)}。

一方、年間行事となった討論会と講演会は、原則講演者自身によって原稿を読み上げるかたちにしていたため、その記録が文章として残った。それらを教育的な素材として使うため、ビルダー誌に掲載するよう編集者であったゴドウィンに協力を求め、シリーズとして掲載されるようになった。おそらくゴドウィンは、内容的にも一般に広く伝える方が、イギリスの建築界にとって刺激になると判断したと考えられる^{注38)}。

ビルダー誌に掲載された討論会の内容は、「記念碑的建築」、「ロンドンの現状」、「批評と大衆の趣味」、「美学的思想」、「建築と科学」といった建築の設計に関わった内容をもつものであった^{注39)}。特に、この最後の「建築と科学」を主題とした討論会は、イングランドの建築家で、1853年から54年にかけて、AAの会長となるジェームズ・エドムストン(James Edmeston 1791-1867)が、1851年に講演者となった討論会の内容であった。エドムストンは、教会の設計を多く手がけている建築家であり、そのなかで、建築家は鉄骨構造の教会においては、アーチの使用を拒否すべきであること、手作りのものと同様に機械生産の知的な表現を多くあり、また過去の経験は、現在の熱い精神とともに使われるべきであること、設計者は、中世の偏見の奴隷となるべきではないこと、を主張した^{注40)}。これは、芸術主導であるゴシック・リヴァイヴァル様式の潮流にある建築に対して、時代を反映するべく科学主導の新しい建築のあり方を提唱する意見であったと解される。

この「科学としての建築」という考え方は、前述した、AA創設の際の討論会で、ドナルドソンが問題提起した「我々の時代の建築」とドナルドソンがUCにおいて行った講義「芸術としての建築、科学としての建築」の内容と共通することが注目される。さらにエドムストンの記録が掲載された同じ1851年に、ロンドンのハイドパーク

で開催された万国博覧会における、技術者ジョセフ・パクストン (Joseph Paxton 1801-65) による鉄とガラスのパビリオンであるクリスタル・パレスが完成し、話題になったという時代背景も影響していると考えられる。

そのクリスタル・パレスを批判した美術批評家ジョン・ラスキン (John Ruskin 1819-1900) は、1857 年、AA の討論会において「近代建築デザインにおけるイマジネーションの使い方」と題して講演しており^{注 41)}、当時どのような建築を新しい様式と考えるのかという問題がいかに重要なのかということが、以上のように創設後 10 年間という長期にわたって AA において行われたことから伺える。

これらの討論を通じて、AA において賛同が大きかったのは、建築は過去のものではなく、現在のものであるべきだという考え方であった。特に創設者のカーは、彼の著作である “The Newleafe Discourses” において「それ（歴史様式主義）は建築ではない、それは考古学である。ごみの科学である」と述べ^{注 42)}、ゴシック・リヴァイヴァルに対する批判を行った。建築家は、理想として過去の建築を振り返る歴史主義に陥るのではなく、建築の本質的な特徴や進化に目を向けるべきであるというドナルドソンの問題提起が AA 創設時の建築に対する考え方となっている。

図 6 AA スケッチブック表紙

ところで、前述したような討論会、講演会さらに展覧会の記録出版は、現在においても継承されている。名前や内容は異なるが、時代順に取り上げるならば、前述したビルダー、その後 1910 年代までは、AA スケッチブックと AA ノート、1920 年代からは AA ジャーナル、1970 年代に AA クォーターリー、1980 年代からは AA ファイルがその役目を果たしている^{注 43)}。

4. AA から AA スクールへ

4-1 試験にもとづく学位の授与

1853 年、AA のメンバーであったジェイムズ・ノウルズ (James Knowles 1831-1908) は、建築教育に関する論文を AA で発表した。それは、建築試験を合格したものにディプロマ（学位）を授与すべきであるという内容であった。このことは、建築家の職能を専門的知識を有した資格として公的にすることと、18 世紀末から誕生したサーヴェイヤーや土木技術者という職能から建築家を区別することを意味していた^{注 44)}。このノウルズの論文が契機となって、1855 年 10 月 6 日に行われた会合において、AA の第 6 代の会長であったアルフレッド・ベイリー (Alfred Bailey) が、それまでの AA での教育的活動を建築家の職能と結びつける提案を行った。すなわち、会員の建築家になるための知識と技倆を証明する試験の実施と学位授与に対する検討である^{注 45)}。

前述したドナルドソンやゴドウィンとともに AA 創設集会に参加していた建築家ウィリアム・タイト (Sir William Tite 1798-1873) は、ベイリーによる会合にも参加しており、そこで彼の提案に強く

印象づけられた。そのすぐ後、RIBA での会議において、建築の公式な試験に基づく資格免許的性格のものを交付することが AA で提案されたという報告を行った^{注 46)}。

RIBA が職能制度の確立を目的として 1834 年に設立されたにもかかわらず、1850 年当時、職能教育を行っている学校は存在しておらず、教育内容と建築家の資格との結びつきはなかった。AA は自主教育の場所ではあったが、そこで得られた知識や技倆を客観的に評価するというものはなかったため、試験の実施とディプロマ (Diploma) 授与を与え、RIBA の会員となるための資格審査を独自に行うという提案であった。翌 11 月には、専門試験の制定と資格免許状 (学位) の交付を求めた AA の覚書が、RIBA に提出された^{注 47)}。

4-2 RIBA による試験の実施

ベイリーによる AA の試験制度の提案の 2 週間後に、RIBA において、建築家ジョン・W. パップワース (John W. Papworth 1820-1870) が、「建築におけるディプロマ」 (A Diploma in Architecture) と題した論文を発表した。そこにおいて、フランスの建築家資格を論じており、RIBA が試験を主宰し、同様の資格を認定するための評議会の設立を提案したものであった^{注 48)}。その評議会の委員として、建築家のドナルドソン、美術評論家のジョン・ラスキン、聖職者である A. J. B. ベルスフォード・ホープ (A. J. B. Beresford-Hope)、さらにコンサルタントとして、建築徒弟制を支持する建築家のジョージ・ギルバート・スコットが加わった^{注 49)}。

11 月に提出された AA の覚書に基づき、RIBA の副会長であった建築家の F. C. ペンローズ (F. C. Penrose 1817-1903) は、試験を「実務的な」課目である、構造、測量、力学その他に限定し、さらに設計（デザイン）という分野には立ち入らないという条件のもと、これが了承された。おそらく、さまざまな知識を総合し、芸術的な要素が加わる設計に対して、客観的な指標や評価を下すことは難しいと考えられたと推察される。そして、1861 年に RIBA は、体系的な職能教育の発展を期して、試験制度を樹立するという趣旨の決議がなされ、自主的試験制度が設けられた。また、1862 年に AA は、この RIBA の試験に対してその準備をするための自主試験クラスを設立した^{注 50)}。

ただし、第 1 回の試験の実施は、2 年後の 1863 年に行われたが、合格者の数は少なく、1881 年までの 18 年間でも 43 名、平均すると年間にして 2、3 名にすぎなかった^{注 51)}。

4-3 建築学校への進化

1855 年からはじまった AA による建築家資格認定試験制度の RIBA への提案と、それを受けての RIBA による試験の実施は、建築教育と資格認定を結びつける制度としては不十分なものであり、制度が固まってくるのは、RIBA による認定校としての建築学校が増加するのは 20 世紀に入ってからである^{注 52)}。

しかしながら、若い建築製図工が自らの相互教育を目的として始めた AA の存在は、イギリスにおける建築家職能団体である RIBA に建築教育を職能教育とすることへの動きを推し進めたことは事実であり、AA 自体も単なる自己学習の場所から、建築学校としての体制づくりが意識されはじめた。すなわち、それまでボランティア（無給）であった講演者に対して報酬を与え、また、決められた課目に対する専門的知識を有する建築家や技術者が、有給で建築教育に当たるようにすることである^{注 53)}。しかしながら、彼らは UC などの大

学における教員のように専任としてではなく、昼間はそれぞれの仕事を行っているというのが条件であるが、実際には、AA が夕方から夜間にかけて行われるため、そのようにせざるを得なかったというのが実情であった。

AA の建築学校としてのはじめは、AA 創設時の討論会で議論された、「芸術としての建築」から「科学としての建築」への変換、さらに「社会を反映する新しい建築」という問題提起に対する、建築教育を通じた、資格制度あるいはビジネスという 19 世紀イギリス資本主義社会における対応であったと見なせる^{注 54)}。このディプロマ授与のための試験の実施と資格取得とのつながりができたことによって、若手建築製図工のアソシエーションである AA は、単なる相互教育の場から建築家になるための建築学校、すなわち AA スクール(The Architectural Association School of Architecture)という現在の名称へと進化する内容が整え始められたといえる。

5. まとめ

以上の考察から、次のことが明らかになった。AA 創設時における社会背景として、19 世紀イギリスにおける建築家の修業の形であった徒弟制度の形骸化という社会問題が存在し、また、18 世紀からロンドンを中心につくられたアソシエーションという労働者階級のための都市文化および教育の促進がはかられていた。AA の創設には、若い二人の建築製図工のロバート・カーとチャールズ・ 그레이が中心となった働きかけがあり、さらに建築家であり UC の教授であった T. L. ドナルドソンや、ビルダー誌の編集者であったジョージ・ゴドウィンらの協力によって創設された。AA の理念と内容は、自主独立を旨とした相互教育の場において、建築家になるための知識や見識を、討論および展覧会などを通して培うというものであった。さらに、教育内容を審査する試験を実施する制度が生まれることによって、建築教育と建築家資格が結びつくことで、学校としての存在意義を有した AA に発展し始めたことがわかった。

次稿では、AA スクールおよびイギリスの建築教育において、フランスにおける建築教育の主流であったボザール方式が、建築家資格の内容と関連しながらいかに導入されていったのかについて RIBA の役割とともに明らかにする予定である。

参考文献

- 1) 瀬口哲夫: 英国建築事情 上下, 建築ジャーナル, 1991
- 2) 渡邊研司: 1937 年 AA スクール学生小委員会によって作成された建築教育システムに関する報告書いわゆるイエロー・ブックについて, 2006 年度日本建築学会関東支部研究報告集, pp. 349-352, 2007. 3
- 3) 渡邊研司: AA スクール学生誌『フォーカス no. 3』における建築教育についての報告の意義, 2007 年度日本建築学会関東支部審査付き研究報告集 Vol. 3, pp. 81-84, 2008. 9
- 4) 渡邊研司: 1935 年 AA スクール内に設立された都市計画コース国土開発計画研究院について, 2008 年度日本建築学会関東支部研究報告集 II, Vol. 79, pp. 349-352, 2009. 3
- 5) 渡邊研司: ル・ブレイ/ゲデス・メソッドの都市計画教育への適用に関する史的研究 イギリス近代建築教育研究, 2009 年度日本建築学会建築教育シンポジウム発表論文報告集 No. 10, pp. 9-14, 2010. 1
- 6) 渡邊研司: E. A. A. ローブによる知的発想法「複合的思考力」について その 1, その 2, 2009 年度日本建築学会関東支部研究報告集, その 1 pp. 613-16 その 2 pp. 617-20, 2010. 3
- 7) Elizabeth Darling: *Re-Forming Britain, narrative of modernity before*

reconstruction, Routledge, 2007

- 8) Elizabeth Darling: *Into the world of conscious expression, Modernist revolutionaries at the Architectural Association 1933-39*, in Ian Boyd Whyte ed. *Man-Made Future Planning, education and design in mid-twentieth-century Britain*, London, Routledge, pp. 157-173, 2007
- 9) Andrew Higgott: *Meditating Modernism Architectural Cultures in Britain*, Routledge, 2007
- 10) Mary O. Ashton: *Tomorrow Town : Patrick Geddes, Walter Gropius, and Le Corbusier in* Volker M. Welter and James Lawson editors, *The City after Patrick Geddes*, Peter Lang, Oxford et al., pp. 191-209, 2000
- 11) Robert Macleod: *Architectural ideology in Britain 1835-1914, Style and society*, RIBA Publication Ltd., 1971
- 12) フランク・ジェンキンス: 建築家とパトロン 16 世紀から現代までの建築家の職能と実務の史的研究, 佐藤彰・五島利兵衛訳, 鹿島出版会, 1977, 原著: Frank Jenkins, *Architect and Patron*, Oxford University Press, 1961
- 13) スピロ・コストフ編: 建築家-職能の歴史, 横文彦監訳, 日経アーキテクチャ・ブックス, 1981 原著: *The Architect: Chapters in the History of the Profession*, Oxford University Press, 1977
- 14) Mark Crinson and Jules Lubbock: *ARCHITECTURE art or profession? Three hundred years of architectural education in Britain*, Manchester University Press, 1994
- 15) Robert Kerr: *The Newleafe Discourses on the Fine Art Architecture*, J. Weale Architectural Library, 1846 (reprinted by Kessinger Legacy Reprints, 2011)
- 16) T. L. Donaldson: *ARCHITECTURE MAXIMS AND THEOREMS IN ELUCIDATION OF DESIGN AND CONSTRUCTION AND LECTURE ON THE EDUCATION AND CHARACTER OF THE ARCHITECT*, Taylor and Walton, 1847 (reprinted by Nabu Public 2011)
- 17) John Summerson: *THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION 1847-1947*, Architectural Association and Pleiades Books, 1947

注

- 注1) 本論では、より一般的な意味を含む建築教育、建築学校および建築職能という語を使う。ただし、内容をより正確に示す場合は、建築ではなく建築家の教育、建築家の学校、建築家の職能とする。また、AA の訳語については、建築協会、建築連盟、などがあるが、association の訳語が、ランダムハウス英和辞典では、(共通の目的をもって組織された) 会、協会、共同団体、社団、会社、結社とあるように定まっていなかったため、本論では略称として AA とするが、association の意味が本来的には上記の定義で () 内が重要だと考えるゆえ、アーキテクチャル・アソシエーションとする。また、考察の対象とする時代は、創設時ということで、ライアンズ・イン・ホールが使用された 1847 年から 1859 年とする。
- 注2) AA の設立もより新しいものが生まれるということで創設という語を使う。現在の AA の会員は全世界で 5000 人を超えている。会員の種別は定期会員、1 年会員、2 週間会員の 3 種類となっている。会員手続きとは全く別に、AA スクールへの入学には、イギリスでの大学入学資格、英語能力、面接等選抜が行われる。入学者には自動的に会員となる。また、AA には President (会長) がおり、AA スクールには会長とは別に Principal あるいは Chairman (学長) がいる。現在全日制の学生数は 650 人を超え、その 82% が海外からの留学生である。
- 注3) 1960 年代までの AA スクールの出身者のほとんどがイギリスおよびイギリス連邦であったが、1970 年代以降、国際化戦略が取られたため、外国、特にアジア諸国出身の建築家が多く輩出した。毎年出版される AA スクールの 1 年間の活動をまとめた Project Review は、多くの学生たちに最新の建築デザインやプレゼンテーションの動向を伝えている。
- 注4) AA Archive は 32 Bedford Square にあり、専門のアーキヴィストである Edward Bottom によって企画・運営されている。
- 注5) Summerson (1947) p. 1
- 注6) C. ディケンズ: マーティン・チャズルウィット, 北川悌二訳, ちくま文庫、上中下, 1993 年 建築家ベックスニフに関する描写は上巻、31 頁、「ベックスニフ氏の専門的な契約は、じっさい、ぜんぶとはいわずともほとんど、弟子の受け入れだけにあった・・・(中略) 彼の天才は、親や保護者を畏にひっかけ、謝礼金を巻きあげることにあった」部分 およびジェンキンス (1977) pp. 177-178 参照。
- 注7) コストフ編 (1981) pp. 204-205

注 8)ジェンキンス(1977)p.182 キングス・カレッジと UC での建築教育は、1913 年に一本化され、現在ではロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ・パートレット・スクールとして、修士課程・博士課程を含めた教育が行われている。1990 年代には、AA 出身の建築家ピーター・クックがスクールのディーンとなり多くの留学生を集めるなど、常に AA スクールとしてのぎをけずる教育が行われている。瀬口哲夫:上,第二章 建築教育 参照。H.Bellot: *University College London 1826-1926*, 1929 参照。

注 9)ジェンキンス(1977)p.183 Crinson and Lubbock(1994) pp.48-49 ドナルドソンは 1865 年まで、ホスキングは 1860 年までそれぞれ教授を務めた。ちなみに 1861 年からホスキングの教授職を受け継いだのは、ロバート・カーであり、彼は 1890 年までキングス・カレッジで教えた。

注 10)ジェンキンス(1977)p.184

注 11) Summerson(1947)pp.4-5 *The Builder*, Vol.4, Sep.26, 1846 pp.464-65 *The Builder* 誌の副題は製図室、スタジオ、事務所、工房、コテージのための挿画入り週刊誌となっていることから、ジャーナリズムの批評的存在が意識されたことがわかる。

注 12)Summerson(1947) pp.4-5、ジェンキンス p.184 および原註 14 RIBA 図書館に寄贈されたカーの本のタイトルページには自署の上に、つたない本ではあるが、当時であってはいかなりの役割を果たした 1865 年 6 月と書かれている。

注 13)Summerson(1947)p.5, Kerr(1846) pp.1-18 Chapter I (建築に関する定義)

注 14)ジェンキンス(1977)p.184、コストフ編(1981)p.206

注 15)Summerso(1947) p.5

注 16)Summerson(1947) p.5 および E.Bottom, “The broad aims of the AA at this stage consisted primarily of ‘the association on the largest scale of the entire body of our professional youth, for the end of self education, and with the good trust of simple self-reliance’ ”, AA History from homepage of the AA School Kerr, (1846)pp162-190 Chapter IX(建築の研究、旅行、芸術の真の原理)

注 17)Summerson(1947) p.5 Kerr(1846) pp116-137 ChapterVII (連続する歴史、近代、コピーイズムについて) *The Builder*, Vol.5 May 15, 1847 p.232

注 18)Summerson(1947) p.5

注 19)サマーソンによれば、ライアンズ・ホールは建築的には面白いものではなく、古ぼけた箱型の建物に、大きな紋章のあるドアがついていた。図 4 参照。

注 20)アソシエーションについては、小関隆:近代都市とアソシエーション, 山川出版社, 2008 年および小関隆編:世紀転換期イギリスの人びと アソシエーションとシティズンシップ, 人文書院, 2000 さらにマルクスのアソシエーションの概念を考察した、田畑稔:マルクスとアソシエーション, 新泉社, 1994 また、結社という側面では、川北稔編:結社の世界史 4 結社のイギリス史 クラブから帝国まで, 山川出版社, 2005 参照。

注 21)このような時代背景の中誕生した AA は、1930 年代においてはその多くの学生が、民主主義あるいは共産主義的立場をとるようになり、権力を有した RIBA による建築教育に対する考え方などに反発を強める。渡邊研司:1937 年 AA スクール学生小委員会によって作成された教育システムに関する報告書いわゆるイエロー・ブックについて、2006 年度日本建築学会関東支部研究報告集、pp.349-352, 2007 参照。

注 22) 小関編(2000)、小関隆:第 1 章クラブで学ぶ 労働者クラブの教育活動とシティズンシップ、pp.40-101 参照。

注 23)筆者が AA Graduate School に在籍していた 1993-1998 では、毎週火曜と金曜にイブニング・レクチャーと呼ぶ一般に公開した講演会が開かれていた。また、年に 2 回ほど、金曜日にテーマをもった討論会が行われており、これが創設来の年事討論会に当たっていると推察される。

注 24)Summerson(1947) p.6 1847 年から 59 年までの会長は 1847-48 Robert Kerr, 1849-50 C.C.Creeke, 1850-53 J.D.Wyatt, 1853-1854 J.Edmeston, 1854-1855 T.M.Rickman, 1855-1856 A.Bailey, 1856-1857 A.Allom, 1857-1858 G.J.Wigley, 1858-1859 J.Norton

注 25)ジェンキンス(1977)p.183 「英国建築家協会(IBA)の事務局長、T.L.ドナルドソンがユニバーシティ・カレッジの建築の教授に任命された。彼はここで「科学としての建築」と「芸術としての建築」-建築に対する十九世紀的態度を反映した区分-という題目のもとに、いささか野心的な講義を組んだ」(訳は邦訳に準ずる) Donaldson(1847) pp.4-54 *Architectural Maxims and Theorems on Architecture in General, Construction*

注 26)Summerson(1947), p.6 ‘an endeavour towards an improved system of architectural study -an endeavour on the part of the students

themselves’ (本論訳出は筆者による)

注 27)特に 1970 年代初期に起こったロンドン大学インペリアル・カレッジとの合併問題は、1958 年オックスフォードで開催された建築教育会議において提案された大学教育のあり方オフィシャル・システム問題に端を発する。さらに、合併問題が 1972 年に学長となったアルヴィン・ボヤルスキーによる AA スクールの国際化を促進した形となった。

注 28) Summerson(1947) p.6 ‘The great question is are we to have an architecture of our period, a distinct, individual, palpable style of the 19th century?’ (本論訳出は筆者による) Donaldson, pp.61-105 Lecture on the Education and Character of the Architect

注 29)Summerson(1947) p.7

注 30)ジェンキンス(1977)p.184

注 31)連健夫による一連の設計教育におけるユニットシステムに関する研究 参照。特に学習スペースに関しては、田村元、連健夫:イギリスの設計教育におけるユニットシステムについての考察-2:施設・学習スペースと学習形態, 日本建築学会学術講演梗概集, pp.565-566, 1996

注 32)Summerson(1947) p.6

注 33)Edward Bottom, History of AA School, AA Archives

注 34)Summerson(1947), p.7

注 35)2011 年 3 月には、AA Archives と題して 1 階ギャラリーにて AA Archives が所蔵する図面や書簡、スケッチなどが展示された。

注 36)Summerson(1947) p.6

注 37)Summerson(1947) p.10

注 38)Summerson(1947) p.7

注 39)Summerson(1947) p.7

注 40)Summerson(1947) p.7 ‘the position of architecture as regards recent discoveries in science’. He said that architects should reject the use of the arch in an iron church; that there was as much expression of intellect in machine-work as in hand-work; that the experience of the past should be used with the fervid mind of the present and that designers must not become the slaves of medieval prejudices.(本論訳出は筆者による) また、エドムストンが教育に優れた建築家であったことは事務所での様子を述べたジョージ・ギルバート・スコットによる記述がある。ジェンキンス(1977)pp.178-179 参照。

注 41)Summerson(1947) p.12

注 42) Summerson(1947) p.8 ‘That’ s not Architecture’, he said in the Newleafe Discourses, ‘that’ s Archaeology, mon cher, the science of Rubbish’ (本論訳出は筆者による) Kerr(1846) pp.1-3

注 43)渡邊研司:AA スクールにおける初期出版物と学生誌の内容について、日本建築学会学術講演梗概集, pp.281-282, 2007

注 44)Summerson(1947) p.9 および Crinson and Lubbock(1994), pp.56-57、P.Metcalf, *James Knowles Victorian Editor and Architect*, Clarendon Press, 1980 pp.80-82

注 45)Summerson(1947) p.11

注 46)Summerson(1947) p.11

注 47)Summerson(1947) p.11 およびジェンキンス(1977)pp.184-185

注 48)Summerson(1947) p.11 およびジェンキンス(1977)p.185 Crinson and Lubbock(1994) p.57

注 49)Crinson and Lubbock (1994) p.57

注 50)ジェンキンス(1977)p.185、コストフ編(1981)p.206 Macleod(1971) pp.84-89

注 51)ジェンキンス(1977)p.187

注 52)RIBA の自主試験認定校には、1902 年に初等と中間試験の免除校として AA スクールとリヴァプール大学が、1904 年に UC が中間試験の免除校となった。瀬口 上(1991)pp.25-30 参照。

注 53)Summerson(1947) p.19-20

注 54)コストフ編(1981) p.206

図版出典

図 1 C.ディケンズ:マーティン・チャズルウィット, 北川悌二訳, ちくま文庫, p.183, 1993

図 2～図 6 Summerson(1947)

なお、この研究は、平成 22 年 および 23 年度科学研究費基盤研究(C)における研究成果の一部である。

(2012 年 1 月 10 日原稿受理, 2012 年 4 月 10 日採用決定)